

わったーまちの話題

10月19日 アルゼンチン国 宮里道場65周年記念式典

棚原出身の故宮里昌栄さんがアルゼンチンへ渡り、コルドバ市で開いた宮里空手道場の開設65周年記念式典が西原町さわふじ未来ホールで開催されました。アルゼンチンから訪れた82人の門下生が、迫真の演武を披露しました。

現在はアルゼンチン国内に78支部のほかアメリカ、カナダ、イタリアなど合わせて88の支部に4,500人の門下生が所属し、これまで10万人以上の空手家を輩出しております。

式では、故宮里氏の次男であり現館長である宮里昌利「沖縄空手道の発展に向けて空手の精神と技を承継させていきたい」と述べました。崎原盛秀町長は「宮里道場は沖縄、西原町の誇り。南米と沖縄の友好のかけ橋としてさらなる発展を期待する」とあいさつしました。

10月23日 西原町のまちづくりを提案
～ゆがふう塾 最終報告会～

中部9市町村の職員が地域の課題を調査研究する研修事業「ゆがふう塾」の最終報告会が西原町さわふじ未来ホールで行われました。今年度は西原町について「西原町ならではの観光振興」「琉球大学上原地区キャンパス跡地利用」「幸せ実感・選ばれるまちづくり（ウェルビーイングの向上）」の3つのテーマについて研究成果が発表されました。

観光振興グループからは「コミュニティバスを観光に利用しよう!」、琉球大学キャンパス跡地グループからは「イノベーション拠点の設立とソーラーカーポートを導入しては?」、ウェルビーイングの向上グループからは「幸福度を測る西原町独自の評価指標をつくりましょう」と提案し、導入による影響や実現までのビジョンもあわせて発表しました。

塾長の宮平栄治名桜大学教授は「データや指標だけではなく実際に現場にいて観察することが重要。今回のグループはそれを取り入れられていて感心しました。市町村に戻ってもここで学んだことを生かしてください」と話しました。

10月26日 小中学生 ビーチバレーボール大会

第15回西原町小中学生ビーチバレーボール大会が西原マリンパークきらきらビーチで開催されました。

秋晴れの空のもと、西原南小学校の平本 高晴さんの選手宣誓を皮切りに、出場した28チーム183人の選手達が、熱戦を繰り広げました。また、地元の沖縄森永乳業(株)から参加者へ飲み物の提供がありました。

大会結果

わらば一の部 (小学4年生以下) 坂田キッズ
うーまーの部 (小学5年生以下) 西原クラブA

ちゃらさんの部 (中学生女子) 西原中学校A
ちゅーば一の部 (中学生男子) MH25

11月11日 ～守りたい 未来があるから 火の用心～

秋季全国火災予防運動(11月9日～11月15日)の一環として、東部消防前交差点で広報活動が実施されました。当日は、東部消防管内3町のキャラクターも参加し、横断幕やのぼり旗を活用して「火の用心」と「住宅用火災警報器設置」を呼びかけました。

東部消防組合管理者である与那原町の照屋勉町長は「火災が発生しやすい時季を迎えるに当たり、火災予防意識を高め、火災の発生を防ぎ、人命と財産を守りましょう」とあいさつしました。

11月15日 島尻青年会議所と町社協と連携! 災害に強い西原町へ

(公社)島尻青年会議所と町社会福祉協議会と西原町の3者により、災害時に協力体制をとって円滑に連携するための協定が結ばれました。この協定により、災害時の支援活動や復興活動において3者で協力して災害対応に臨むことが出来るようになります。

また、締結式の前に「命を守る防災」と題した基調講演がありました。講師を務めた賀数淳氏は、内閣府認定の地域防災マネージャーとして何度も被災地に足を運ばれており、その豊富な経験をもとに震災の教訓を話しました。

賀数氏は「防災に『なんくるないさ』はありません」東日本大震災の時も、1月の能登半島地震も先日の北部大雨災害の時も、現地の被災者は「まさか災害に遭うなんて思ってもいなかった」と口をそろえて言います。災害はいつどこで起こってもおかしくありません。日頃から命を守る心構えを!と防災の意識と知識を高める重要性を呼びかけました。

第十七回西原町文化祭

「承継・創造・躍進」をテーマに第十七回西原町文化祭が10月26日(土)27日(日)にさわふじ未来ホールで開催されました。

町文化協会の各部員は展示部門と舞台部門に分かれて、日頃の鍛錬の成果を発揮し、来場者の心を魅了しました。



提供 西原町文化協会写真部会



「シンカヌチャー」を力強く演舞
「ていんさぐぬ花」を歌い奏でる

ハワイのニシハランチュ
2か月の研修成果を
堂々と披露

令和6年度海外移住者子弟研修生受入事業の修了式および報告会が、11月21日に中央公民館で開催され、親戚や友人など多くの方が集まりました。

我謝にルーツを持つ、ハワイ出身の西原町系4世の小橋川・シゲオ・トッドさんは、西原町初となるハワイからの海外移住者子弟研修生として、10月に来沖し、2か月間の文化研修や日本語研修、町内小中学校での交流授業など様々な体験をしてこの日を迎えました。トッドさんは、研修で学んだ横笛、太鼓、三線と10年前からハワイで続けているエイサーを堂々と披露し、会場では盛大な拍手が響き渡りました。

トッドさんは「素晴らしい機会を与えてくださったありがとうございます。私のルーツである西原で学んだ多くのことをこれからも学び続け、故郷で共有します。来年は沖縄からハワイに移民して125周年になりますので、ハワイ各地でエイサーを踊りお祝いします。また皆さんとお会いできることを楽しみにしています。いっぺーにふえーびるマハロ」と想いを込めて言葉を述べました。

文化財
コラム

むかしのにしはら

私たちが住む西原町。むかしの西原ってどうだったのだろうと思っただことはありませんが、むかしのことは、今のようには写真や映像が残るわけではなく、むかしの西原の詳細を知ることはできません。しかし、今に残る過去の手がかりをもとに、推測することはできます。まず、手がかりのひとつに、遺跡があります。遺跡は、人の活動の痕跡が残っている場所のことです。現在確認されている西原の遺跡は、出土した遺物などから、グスク時代と呼ばれる二世紀前後から一六世紀頃の時代以降のものが多いことがわかっています。

また、西原には青灰色の泥岩(クチャ)とそれを母体としたジャールガルという土壌が広がっています。この土は、耐水性が強く、稲作などにとても適しているようです。

これらのことから、西原の地は、農業の発達に伴ってジャールガル地帯が開発され、水田地帯が広がり、人の生活の場となっていたのだらうと考えられています。

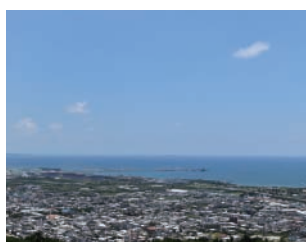
そういえば、西原は「サトウキビ」の村ではなかったか。稲作?水田?と思う方もいるかもしれません。

西原がサトウキビ、糖業の村となったのは、明治時代以降で、琉球王国時代は王府の穀倉地帯として重要な役割を担う稲作の村でした。このことについては、一六世紀頃から、文字記録が残されるため、手がかりが増えてきます。一七世紀半ばに編集された「琉球国高嶺」によると、当時の西原間切(間切:現在という市町村にあたる沖縄独自の行政区画単位)の水田石高は、間切石高の約七割を占めていることが記録されています。これは、中頭・島尻地方でもトップクラスの水田地帯であり、当時の西原がまさに「稲作の村」であったことがわかります。

文献資料だけでなく、現代に生きる私たちの生活の中においても、「稲作の村」であったことがわかる手がかりがあります。それが、伝統行事です。古くから残る集落では、稲葉を使った綱引が受け継がれていたり、稲の生長を祈願したり、収穫を感謝するウマチ・祭神等、稲作に由来する伝統行事が残っています。

稲穂が広がっていたであろうかつての西原から姿形は変わり、住宅街が広がっている今の西原ですが、五穀豊穡の祈願や感謝を大切にしている精神や心は変わらず受け継がれています。

※参考文献:『西原町史 第一巻 通史編』/西原町教育委員会・「沖縄大百科事典」/沖縄タイムス社



今の西原の町並み
(令和6年度運玉森より撮影)



1979年サトウキビ畑の広がる西原
(与那城周辺)

お問い合わせ 文化課 文化財係 ☎098-944-4998